



# 放送作家情報

1999/3/25 Vol.15

発行/社団法人日本放送作家協会  
編集/広報委員会  
〒106-0032 東京都港区六本木6-2-5/ハラビル  
TEL 03-3401-5996 FAX 03-3479-4250

6 2期号

特集

## デジタル VS アナログ

「放送作家情報」第15号をお届けします。

世の中、デジタル化という動きが、様々な業界で進んでいます。雑音の中でもなんとか会話をすることができたアナログ方式の携帯電話はいつの間にか消え、雑音はないが、プツンと音が消えてしまうデジタル方式の携帯電話に変わった。

レコードなんてものも消えてしまい、ほとんどがCDになってしまった。カセットテープに録音して、ウォークマンで聞く。なんてつい最近だったが、今はCDからMDにダビングして、CDと同じクリアな音で聞くという。

数年前まで、テレビ原稿を前にし、手の小指側を鉛筆の汚れで真っ黒にし、消しゴムのカスで机中を汚していた。ところが、今はパソコンのワープロソフトを立ち上げ、画面を見ながら書いている。間違えた部分は、カーソルを動かして消す。そこには、消しゴムのカスも鉛筆の汚れもない。いわゆる我が家のデジタル化。

今回の放送作家情報は、デジタル化について、様々な現象をとらえてみました。各テレビ局のニューメディア関連セクションにお話を伺いましたが、今は、まだ、名前などを出さないならお話ししましょう……という話もありました。カタカナや、よく分からない専門用語も数多く出てきます。アナログ、手書きにこだわる人への脅迫ではありません。こんなデジタル化の時代を前にして、私たち放送作家がどうなるのか？そんなことを考えながらお読み下さい。

### CONTENTS

|                                  |    |
|----------------------------------|----|
| <近未来デジタル環境>                      |    |
| 20XX年、ある一家のリビング                  | 2  |
| 想像力の臨界点                          | 4  |
| 放送作家・脚本家フォーラムについて                | 5  |
| <ドラマ制作現場はどーなっておるのか？>             |    |
| 黒いべんとう箱の中身                       | 6  |
| <受け手の事情は？>                       |    |
| デジタルとアナログ                        | 7  |
| NHKラジオドラマ・データベース                 | 7  |
| デジタル時代における作家とプロデューサーとの関係はどう変化するか | 7  |
| パソコン通信とインターネットの違い                | 8  |
| <電腦時代の新コミュニケーション>                |    |
| オフラインあれやこれや                      | 8  |
| 守りたかった手書き原稿                      | 9  |
| 仕事はデジタル派、趣味はアナログ派                | 10 |
| 「紙がない！」                          | 11 |
| <デジアナ顛末記>                        |    |
| 「放送作家情報」ができるまで                   | 11 |
| EDITORS' LETTER                  | 12 |

### EDITORS' LETTER

#### 広報委員のデジタル武装

広報委員は、すべて大手パソコン通信、インターネットプロバイダー、ニフティのIDを持っています。このID、銀行のキャッシュカードのような、様々な機能を持ち、パソコンを使ったオンラインショッピングで買い物もできるし、過去の新聞記事、有名人のプロフィール、Eメールの送受信、電子会議室の発言、さらにオンラインでパソコンソフトを買うこともできます。

なぜ、広報委員が全員、このようなIDを持っているのか。それは、Eメールで、広報委員会のお知らせだけでなく、広報委員の連絡も、そして、原稿の送受も行えるからです。そして、同じニフティという企業を選んだのは、メールを送ったのに、相手に届かない、という事故もなく、さらに、相手がいつ読んだかなど、時間まで分かるという機能があるからです。

もっとも、時間まで分かるということ、  
「東海林は、夜中の3時にメールを読んでいた」  
などの私的時間の動きまで分かってしまうケースがあるのは、仕方ない。

実は、企業や他のプロバイダーを使った、インターネットでのEメールは、届かない、というケースが意外と多いのです。それはインターネットが、様々なホストのコンピュータをパケットリレーのように、データを送受信しているために、ときどき、どこかに紛れ込んで行方不明になってしまうからです。そして、送った方が安心していても、とんでもないことになった！なんてことも。  
パソコン通信やインターネットのユーザーが拡大するに従い、この辺りの事情を知らない人も増えてきました。インターネット、パソコン通信利用歴10年の先輩に言わせると、重要な書類は、インターネットのEメールは使わない。だそうです。

広報委員会としては、次なるステップは、ホームページの立ち上げに取り組みます。本来なら、ホームページの場所代というものが必要ではありますが、ニフティと交渉し、放送作家・脚本家フォーラム（別項目参照）という、放送作家を目指す人が集まることが出来、さらに、放作協の広報機能も持つフォーラムを設定することで、ホームページ設定料を無料にさせていただきました。

財政難、不況の時はバーターで、というのが番組作りの基本でもあります。

さて、今回は広報委員が取材したり、自分の回りのデジタル事情を原稿にまとめましたが、次号は、皆さんのデジタル革命や、アナログへのこだわり、反論などを紹介したいと思っております。今回の放送作家情報を読んだ、ご意見や、言いたいこと、個人発の情報は、Eメールはもちろんの事、郵便でもかまいません。Eメールは下記の広報委員のEメールアドレスへ。郵便は放送作家協会宛にお送りください。

広報委員長 東海林 桂

- 企画・編集/広報委員会 (五十音順)
- 井川 公彦 CZT02355@nifty.ne.jp
  - 今井田 博 PXU05766@nifty.ne.jp
  - 長川千佳子 QYA02073@nifty.ne.jp
  - 東海林 桂 SDI00483@nifty.ne.jp
  - 東 多江子 EZT00250@nifty.ne.jp
  - 八木 泰子 (星川) TBC02766@nifty.ne.jp
  - 山田 典枝 HCA03354@nifty.ne.jp

デザイン・DTP/Catamaran  
印刷/北川印刷株式会社

しない原稿はコンピュータのファクスソフトで受信すると効率的。原稿を確認してからプリントする/しないを選択できる中間的性格のファクス機器も販売されている。

**スキャナ** 画像読み取り装置。3万円台から販売されている。

**2値化** ここでは簡単にモノクロデータのことと考えてください。

**BMPデータ** マイクロソフト標準の画像データ形式。カラー画像も扱える。欠点は重い(データの分量が多い)こと。

**OCRソフト** 文字(正確には文字画像データ)を認識・解析してテキスト・データにするアプリケーション。手書き文字を認識できるソフトもあるが50万円くらいと高価。

**きず** きずを消していくこともできるがかなり手間がかかる。

#### 原稿②の場合

電話で原稿依頼。OSにMacをお使いなので、お会いしたとき2DDフロッピーにセーブした原稿を手渡ししていただくことに。

いただいたフロッピーを家にもって帰りアクセスしようとしたが「フォーマットされていません」のメッセージ。改めてINET経由でメール送信していただき、めでたくデータ取得。

#### 注記②

**OS** オペレーティング・システムの略。マイクロソフト社のMS-DOSやWindowsもOSのひとつ。そのほかに、Macintosh、UNIX、TRONなどがある。

**Mac** アップル・コンピュータ社が開発したコンピュータ、Macintoshの略称。

**手渡し** 手渡しの場合雑談なんかしちやったりして有益。

**2DDフロッピー** 3.5インチフロッピーには2DDと2HDの2種類がある。「2」は記録面が表裏両面である意味。「DD」「HD」は記録密度のちがいを表し、「HD」はHighDensityの略で密度がDDの倍。MacとWindowsでデータのやりとりをするときは2DDフロッピーを使う。

**セーブ** データを保存すること。

**手入力** 入力方式には声による音声入力もあるが、キーボードの扱いに慣れさせれば手入力が一番確実な入力手段。

**赤字校正** 赤字校正の際、人間の脳が処理している工程を分析的に記述すると以下のようになる。**元原稿**の字を形として認識→**校正紙**の字を形として認識→このふたつの形が一致すれば次の文字に移動、一致しなければ赤ペンで正しい字を記入。一見超アナログ的だが、この処理工程は将来主流となると思われる光コンピュータを暗示している。

**NiftyManager** ニフティ・サーブの会員同士がデータのやりとりをするにはこのアプリケーションを使うのが効率的。

**メール送信** 電話回線を使ってデータを送ること。

**アクセス** フロッピーだけでなく、ハード・ディスクや周辺機器に対しても使う。魂呼びに似ていてアクセスできないと永遠にその中身と再会することは不可能。

「フォーマットされていません」MacでフォーマットされたフロッピーをWindowsで呼び出したのでこのメッセージが出た。MacとWindowsは、その昔のβとVHSのような関係で、互換性はないが、最近では特殊なソフトを介することで使える場合もある。

**INET** 世界中に接続されているコンピュータネットワーク。元はアメリカの情報ハイウェイ計画で、大学や研究所のコンピュータをつないだ専門家の使うネットワークだったが、今では電話回線を使い、世界中のスーパーコンピュータから、家庭用コンピュータまでをつないでいる。



夕食を終わってデジタルターミナル<sup>\*1</sup>の情報ボードを見る。現在ストックされている番組や新聞、ソフトなどの情報が表示される。

地上波のテレビは、わずかにその地域のローカル情報が流れているだけで、コマーシャルも地域の商店街など。大手企業は、そのほとんどが衛星放送でのCMを流すだけとなっている。夕食後に何を見るか、音楽を聴くか、映画を見るか、それともゲームをするか？

とりあえず、毎週衛星デジタルで放送されている、話題のドラマを見ることにする。デジタルターミナルのお好みドラマのタッチパネルに触ると、300番組以上がストックされていることが分かる。そこで検索キー<sup>\*2</sup>で「今日」というキーを押すと、そこには、今朝から現在まで放送されたドラマの中から、過去に1度でもアクセスした番組が、すでにデジタルターミナルにストックされていることが分かる。

A衛星デジタル放送のアメリカ製のドラマを見ることにする。

そこでタイトルを表示させると、その放送は前編後編に分かれていて、今週は後編であったことを知る。先週は、仕事が忙しく、テレビを見ていないことを思いだし、先週の放送から見ることにする。デジタルターミナルのキーで、今度は番組名と放送回数をインプットすると、先週の番組タイトルが表示される。「決定」キーを押す、モニターに表示させる。

バージョン設定<sup>\*3</sup>が表示される。今日は英語ノースーパーで見るか、吹き替えで見るか？それとも字幕付きの英語で見るか？様々なチョイスが出来る。1時間

の番組を楽しむとモニターに文字が出る「この番組を保存しますか？」保存のキーを押すだけで、いつでも、もう1度見ることが出来る。デジタルターミナルの故障やデジタル情報の損傷に備えて、バックアップ<sup>\*4</sup>を取る。

小さなLSIカード<sup>\*5</sup>に番組が保存され、そのカードをもう1台のデジタルバンクに入れ、データを移動する。さて、そろそろ寝るとするか…。

デジタルターミナルから、デジタルラジオを選び、スリープタイマーをセットする。その前に、深夜に放送される、番組の録画をセットする。リビングからベットルームに移動。すでに、優しい音楽が、ベットルームに流れている。

いつの間にか眠りにつく。

寝たのをホームコンピュータがセンサーで感知し、音楽と照明を止め、ホームセキュリティーが家と住人を守っている。

と、これが20XX年の生活の予想です。デジタル化の流れは、生活の中のエンターテイメントを大きく変えるかも知れません。

下のそれぞれの用語解説を合わせてご覧ください。

#### 用語解説

**\*1 デジタルターミナル** デジタル衛星放送を受けるターミナルは、家庭内オーディオ機器のネットワークの要となります。衛星放送を受信し、そのターミナルに情報を蓄積、好きなときに好きな番組を、見たり、聞いたりすることが出来るでしょう。さらに、新聞などもデジタル情報化され、衛星放送による宅配となるでしょう。私たちは、このターミナルから、MD、DVD、パソコン、モニターなどにデータを送り出し、読んだり、楽しむことが出来ます。

また、デジタルで送られてきた番組はデジタルで蓄積されるので、劣化することなくいつでも好きなときに楽しめます。さらに、タイマー録画など、様々な機能が付き、マニュアルと格闘することも考えられそうです。

**\*2 検索キー** デジタルターミナルに蓄積された数多くの番組を、キーワードで探す機能です。例えば、現代で言う出演者名、脚本家名、放送日、番組タイトルなどをインプットすると、見たい番組や探している番組が分かるという優れ物。

**\*3 バージョン設定** テレビ放送される番組は、国境を構わず放送されるようになる。映画、ドラマ、情報番組、ドキュメンタリーなど、ジャンル別チャンネルもあれば、総合局もある。

そして、数多くの人に見てもらうために、現地語放送は当然ながら、英語放送、障害者のための字幕放送、解説放送、吹き替え放送など、誰もが楽しめるプログラムとなる。デジタル化されると、一つの電波に数多くの

情報を同時に送ることが可能となる。

**\*4 バックアップ** 現在もパソコンのデータや情報はパソコン本体だけで保存しておく、パソコンの故障などにより、データを損なう場合がある。本体が故障してもデータをもう1カ所に保存することで、データの不意の事故に対応する。

**\*5 LSIカード** 大規模集積回路にデジタルデータを保存するカード。すでに、商品化もされているが、さらに大容量のデジタルカードの出現で、ホームビデオの録画などもカードで行うようになる。またデジタル信号なので、何度ダビングしても画像の劣化がないので、違法ダビング番組が流通しないように、放送の際は、ダビングできないような信号を付加して放送することも考えられる。

はたして、20XX年に本当にこうなるかは、分かりませんが、デジタル化は、様々な環境を変えるでしょう。その変わる部分も大きく4つあるとされています。

#### (1) 圧縮技術の発展

番組などのデータをそのまま電波に乗せるのではなく、データを圧縮し送る。この技術が発展することで、さらに大容量のデータを電波に乗せることが出来るようになります。

#### (2) 多チャンネル化、あるいは、高品質化

1つの電波にいくつものデータに乗せることが出来るので、多チャンネル化が進みます。あるいは、画面をより綺麗な画像として送り出すことも可能です。

#### (3) 移動体向けのテレビ放送

車載テレビ、列車内テレビなど、移動しながらテレビの視聴が可能となります。現在も車載テレビやJR、私鉄の列車などの車内テレビが設置してありますが、移動しているために、どうしても画面が乱れます。しかし、デジタル放送だと、画面は鮮明に映し出すことが出来ます。もっとも、デジタル波が途絶えると、画面は何も映らない状態になります。

#### (4) マルチメディア化

前項に書いた20XX年の家庭のように、テレビはテレビ、ラジオはラジオという別の物ではなく、デジタル放送が、すべてのデータを扱い、テレビ、ラジオ、新聞、通信、パソコンという家庭用のオーディオ機器から情報端末、電話などがひとつのものとして扱われるようになるでしょう。

### 近未来のデジタル環境はこうなる

## 20XX年、ある一家のリビング

東海林 桂

それでは、私たち放送作家を取り巻く環境は、どうなるかを、ニューメディアを計画している、各セクションの方に伺ったところ、こちらにも変化があることが分かりました。

まず、放送機器のコンピュータ化によって、制作費が安くなること。しかし、その安くなった制作費が、脚本料や構成料に使われるかということ、そうでもなさそうです。逆に小さなプロダクションや、多チャンネル化で、優秀なソフトを作れるところだけが生き残り、そこには制作費関係も、安く面白いが、求められると思われそうです。

そして、番組ソフトを多数持っている企業やプロダクションが、強くなり、放送局と製作会社の立場も、今とは違う物となるかもしれないか？具体的な例とすると、SMAPなどの人気タレント(ソフト)を持っているプロダクションに、局側が頭を下げて番組のお願いをする。(現在も同じような状況だと思うが)これが、今以上に強くなり、番組を作れる人をいかに多く押さえているかで、強弱関係が決まるとのこと。

すでにTBSなどでも話題に上がっている、制作セクションの切り離しも十分に考えられるようです。これは、地上波とBS波の割合が5:5になると、絶対的にこのような体制になるだろう。と、断言する関係者もいました。ちなみに現在の地上波とBS波の割合は9:1だそうです。さらに、映画を作るチームのように、テレビ番組もチームで作られ、プロデューサー年俸制、ディレクター年俸制も、より拍車がかかるようです。

そこでネックとなってくるのが、著作権問題だそうなんです。現在、著作権は個人が持っています。個別に著作権を持っているので、その人が亡くなったり、その人の承諾を得たりしないと、2次使用が出来ない。日本で作られたドラマを海外などで売ろうとしても、権利関係を処理するだけで、ペイしない状況で、日本のテレビソフトが世界に出て行くには難しい環境だそうなんです。

世界のテレビ関係を見てみると、著作権などは、製作会社が一括で持っているケースが多いとのこと。また、すでにデジタル化を想定し、フランスとイギリスの放送局が合併するなどの動きもあるそうです。これにより、フランス、イギリス両局の共同製作が可能となり、フランス語圏、英語圏への番組販売としてのビジネスも活発に行えます。

つまり1つのソフトで何カ国ものデジタル放送に使えるので、収入面も期待できる。その分、脚本料や構成料も高額にすることが出来る。

ところが、日本の場合、まず第1に、日本語圏が世界で極端に狭い。日本語で番組を作っても、海外で売れるか？売れても現地駐在日本人対象のCATV程度では、著作権処理でペイできない。

どこまで世界で売れるかは、まったく分からないようです。その反面、デジタル化された番組やソフトはコピーが簡単に



なるので、問題点も浮上するでしょう。さらに、SONYなどは、デジタル放送を使い、CDなどの音楽データを送ることも、計画しています。

レコード店が無くなるかも…。デジタル放送の多チャンネルが進むと、次にレンタルビデオ店が、なくなるかも？ デジタル化は番組ソフトの豊富さが勝敗の分かれ目だそうです。

そんな日本に海外の製作会社が真剣に番組を売り込みはじめたら、はたして、日本のテレビ界が生き残れるか？ についても、疑問符が付くとのこと。

現在、スカイパーフェクTVやディレクTVでは、すでに、CNNやフォックス、ディズニーなどの制作した番組が放送されています。これらを外資系エンターテインメントとすると、和製エンターテインメントに勝算はあるか？

話を映画界に向けて、皆さんもご存じのように「洋高邦低」。テレビにはそんな状況は考えられないという方もいますが、それは、現在テレビに外資の規制が行われているからだそうです。この規制が緩和され、デジタル化が同時に行われる、そのときこそが「テレビ鎖国」が解かれる時だ。との説も聞きました。

では、テレビ鎖国が解かれた時、どんな番組が放送されるか？ あくまでも例であるが、と前置きして「日本のテレビの歌番組に、マイケル・ジャクソンやセリーヌ・ディオンの登場するようになる」とのこと。なぜなら、日本のCDマーケットは、世界でアメリカに次いで2位の国だからだ。外国人タレントが、あまり日本のテレビに出ないのは、ビジネス市場で、日本のブランドがまだ、認知されていないからだそうです。

日本のブランドが世界で通用しているのは、家電や車などだけで、日本人なら誰でも知っている、東京のキー局の名前を使っても、エンターテインメントの世界、それもグローバルな市場では全く通用しないのが、現実だそうです。

テレビがデジタル化される、外資の規制が解かれる時、放送作家の環境も大きく変化することでしょう。その変化に的確に対応することが出来るのか？ あるいは、しなくてもいいのか？ その答えが出るのは、泣いても笑っても、あと数年後ということになります。

現実として2001年1月1日。民放5局、WOWOW、NHK、スターチャンネルのBSデジタル放送は始まりです。

# 創造力の 臨界点

井川 公彦

現在のアナログ放送からデジタル放送になったからといって、どんなメリットが視聴者にあるのだろうか。そして、放送事業者側にはどのような利点が……。

「地上デジタル放送懇談会」という組織の報告では、視聴者と放送局、それぞれのメリットを次のように報告しているらしい。

まずは視聴者サイド。

高品質な映像と音声サービス。チャンネルの多様化。テレビ視聴の高度化。高齢・障害者にやさしいサービス。安定した移動サービス。

そして放送局側は、多彩な放送サービスの提供によるビジネスチャンスの拡大。番組制作の多様化・効率化の実現。

## 放送作家・脚本家フォーラムについて

放送作家になりたい、脚本家になりたいという人が、どんな道筋でプロになるのか？ そんな人々の交流の場として、ニフティーに設けたのが「放送作家・脚本家フォーラム」です。

このフォーラムというのは、パソコン通信上で楽しむ文字だけのコミュニケーションの場です。パソコン通信はやっているが、フォーラムには参加したことが無いという人、意外と多いのです。つまり、Eメールや情報収集にだけ使っているという人がほとんどかもしれません。

そんな状況にあって、このフォーラムでは、シナリオ道場という、とりあえずテーマにそって書いてみようという試みを行っております。

作品を勝手に書いて、投稿して、それぞれが批評する。そこには、プロも素人も垣根を超えた交流が展開されています。そして、このフォーラムには、実は隠された会議室があります。それは、放送作家協会会員だけの会議室。現在も数十名が参加しておりますが、発言者はごくわずか。しかし、読んでいる方は多いようです。もし、あなたがニフティーのIDをお持ちで、このフォーラムに興味がある方はお越しください。

コマンドは「GO FTVW」です。

その際に放送作家協会会員であることを、東海林 桂(SD100483@nifty.ne.jp)にメールでお知らせください。隠された会議室の鍵を設定します。また、今回の放送作家情報をお読みになって、ニフティーのIDを取りたいと思った方は、0120-508-502に電話すると、入会に関する情報を送ってくれます。

省エネ化の実現。放送番組ソフトのマルチ化への寄与。視聴者との一体化。

——ということだが、なんだかよく分からないよねえ。

高品質の画像ってけど、悪いよりいい方がましって程度で、本当に質にこだわるのは、画像や音が「趣味」の人ではないだろうか。

つまり、ぼくたちがお金を払って、お客としてどんな満足を得るかってえと、今と大して変わんないじゃん、という感じは否めない。

例えば、レコードからCDに変化していった時に、確かに音質はよくなったのだろうし、選曲も自由自在。MDも一般的になった今、自分だけの「特選盤」を容易に作るができるようになった。でも、それだって、手間は少々かかって昔からやってたこと。

つまり、「便利になった」ってことなのかなア。人間は困難に立ち向かう勇気がある動物である一方で、できればナマけたい動物でもある。だから、楽ちんな媒体を選ぶのは、自然のなりゆきでしょう。

とすると、テレビ自体が今より、ずっと使いやすいように変化するのだろうか？

ぼくなんか今でもリモコンより、カチャカチャとチャンネルを回す方が、選局する喜びを感じるのだ。が、そういう行為は「無駄」として排除して、自分が見たい場所に一挙に飛びたいのが現代っ子の感覚らしい。

情報が増えるだけなら、今だってCSやBSで、相当溢れているわけでしょう。インターネットだって、めちゃくちゃ普及している現在、どう情報を整理するのだろうか。部屋の片づけもできないぼくなんか、頭の中がおかしくなってしまうそうだ。

以前、インタビューしたCSの社長さんが、「地上波はスーパー。BSはデパート。CSは専門店」と、たとえていた。なんとなく分かるけれど、ぼくら視聴者には、それぞれどんな良さがあるのか、明瞭には判別できない。

つまりは選択肢が無制限に広がったというだけに過ぎない。

無数に選択できることに、果たして、どれだけの人たちが喜びを感じるのであろうか。人間が自分に必要なチャンネルは、7、8回線に過ぎないという。無数に近い中から、わずか7、8回線を探すことの方が難しいのではなからうか。例えば、本屋に立ち寄っても、自分が回るコーナーって大体決まってるもんなア。

「へえ、こんながあるんだ、すげえ！」

とか言って、まったく見知らぬコーナーに自ら迷い込むことはまずないし、そこから必要なものを選択するのもまた大変。

しかし、である。

作り手側に負担する我ら放送作家からすれば、仕事場は無制限に広がっていくわけである。

デジタル放送になって、情報を圧縮して送ることが可能になると、インターネットと同じように双方向で「意思」を送

りあえる。だから、現在の製作システムにも変化が起きて、視聴率至上主義もなくなる。「暴れん坊将軍」と「めっちゃいけ」が比較されることもなくなるわけだ。

とすれば、作り手は、一つのラインを求めているオタク的な番組でも作れる可能性も秘めているわけで、なんだかよく分からない妥協の産物ではなくて、「作り手の熱い思い」をダイレクトに伝えることもできる。

その番組を、アメリカの番組シンジケートみたいに、色々なラインに売って、二次使用料をガッポリってこともありえるのだ。

作家やディレクターにとっては、バラ色の未来が開けているのではないか。NHKから民放キ局の放送枠で仕事にあぶれてしまっても、いっぱいあるやんけ。しかも、自分の趣味や特技をちゃんと生かせる。わーい。

しかしだ。やはり制作費は乏しくなるのは目に見えている。欧米のように映画や放送を文化と認めない国が多額な援助をするはずがない。不良債権処理に使う1000分の1でも、すっごい潤沢な資金となるのに。

てことで、例えチャンネルが数百に増えようとも、ソフトはありものの使い回し、新しく創作されるのは、結局、あたらざるもの。アナログだろうがデジタルだろうが放送は公共性が大切だから、放送法や電波法によって規制されるのは確か。作家のポリシーとかは、やはり二の次となる。

そんな中で、今までになかったような新機軸の創造！というの、なかなか発見できないのではないだろうか。

ソフトの圧縮技術、送信技術などによって、パソコンや電話との一体化をして、利便の良さは向上するだろうが、番組ソフトの劇的変化は期待できそうもない。

いや、劇的変化があるとすれば……

個人個人の思想や感情を消し去る物語ではなからうか。

例えば、記憶が主人公になるようなドラマ。

画面には、何も映っていない。そこは宇宙かもしれないし、人の心の中かもしれない。ホワイトボードに彩色してゆくように、視聴者が様々な思いを映像や音楽で描く。

演劇でもドラマでもバラエティでもドキュメンタリーでもない、「個人的な思考」の提供。それに歓喜する人、批判する人、共感する人……それらが混沌となって、人類の心の奥底が吐露される。例えば、「宇宙での孤独」を知ることには懸念になるかもしれない。そして、それが、かつてなかった人類の生きる方向を決めるかもしれない。

それでもなお、ぼくは、人間の本能である「同情する心」を呼び覚ます「虚構」のために、誠心誠意で嘘を作りたいと思う。

それにしても、結局、儲かるのはパソコンメーカーか家電メーカーだろうなあ。だって、テレビ送受信のシステムが変われば、買い換えざるを得ないもんなあ。今使ってるテレビじゃデジタル放送になれば映らんのだ。

モノを売ることに「創造」を売ることが勝てるのは、いつの日であろうか……。



## 黒いべんとう箱の中身

東 多江子

99年2月某日。

東京渋谷・NHK放送センターのドラマ番組部の部屋に侵入。

決して非合法にはない。この日は、本誌の記者として取材に訪れたのである。

時間は夕方6時半。いつもよりスタッフの姿が多いように思える。…あるある、それぞれのデスクの上に黒いコ。きちんと所有者の名前も張り付けてある。わたしにはどうしても、黒いべんとう箱に見えて仕方がない。これがIBMのノート型パソコン、シンクパッドであることは重々知って来たのではあるが。そうか、ふたが閉まったまま机の場所をふさいでいるせいか……。

さてさっそく、チーフプロデューサー氏に話を聞く。

そもそも、番組制作局にデジタル制作情報システム、通称「ベアトス」あり。企画準備から、制作過程、放送送出、そして番組保存まで管理しようというシステム。これにのっれば、企画書、構成表、台本、映像ソフト、番組記録(出演者、出演料他)、放送登録などなど、一括管理できるはずなのだが……。

「ドラマの場合、ライン化はなかなか難しいですね」

ドラマ作りの場合、カット割り(コンテ作り)や俳優への芝居付けなど、どうしても「デジタル化」できない作業がある。この作業がメインといってもいい。

ドラマ番組部にシンクパッドが導入されたのは去年の秋と言うことだが、実際これで行われているのは、エクセルやワードなどのソフトを使ってロール表づくり、スケジュール表づくり、提案票のストック…「その程度でしょう。もちろん、庶務的な部分では大いに活用してますが」ということなのである。

再び部屋の中を徘徊。

オーディオドラマ班では、面白いホームページを見せられた。NHK民放問わず、ラジオドラマのすべてを網羅して、タイトルから放送日、脚本家から出演者までのデータが揃っている。これ、一般聴取者が作ったHP。「あの番組いつオンエアだったっけ、というとき、これ、利用させてもらってます」

とディレクター氏。立場が逆のような気がしないでもないが。でもこれがまさに、情報の双方向化!

その隣の「島」では、テレビドラマのリサーチャー氏が、べんとう箱のふたを開けて作業中。ロケ場所を探すのに、インターネットは欠かせない、という。

「でもこのインターネットの情報ってのが結構落とし穴でしてね」

実際に電話し出向いて自分の目で確認するまでは、信

用するべからず。

彼はリサーチャーの立場で資料をフォーマットに保存してはいるが、そのフォーマットはドラマ番組部全体で共有されてはいない。誰もが、同じ組み合わせでスーツとネクタイを着ることがないように、フォーマットの使い勝手もちがうようである。

おっと、知り合いのディレクター氏発見。「パソコンの話? 僕に聞いてもムダ!」

いきなりごめんなさいの体勢。パソコンに「間に合う」お年頃の30代、なのに「スケジュール表は手書きです!」。やはり向き不向きがあるのか? いや、局内の講習会に行く暇がない。あらら、べんとう箱が埃をかぶってるわよ……。

今度は、某大物プロデューサー(と言っておこう)にばったり。かつては、「作家は手書きで書くべし」とおっしゃっていたのを思い出した。

「別に今は、どっちでもいいと思うけど」

へえ、そうなんだ。今、脚本家諸氏の中で、パソコン派(ワープロを含む)7割に対して、手書き派3割ぐらいだろうとのこと。

「手書きの方が、どこがどう直ったか、よくわかったけどね」

わたしにも、手書きの時代があった。吹き出しや差し込みを駆使したものだ。それが書き手の「悶々」の足跡だったのである。

もう今、その足跡は残らない。ほんとに、どこをどう直したか、気づきつつ読んでもらってるかなあ、と不安には思う。

しかしもう、「あの頃」には戻れないのだ。もう手書きで原稿用紙を埋めるカラダじゃなくなってるのだから、文句は言えない。

シンクパッドがもっと重宝に使われるようになれば、「脚本、メールで送ってください」という日も近い。だからといって、脚本家と演出家、プロデューサーの関係がどう変わるものでもないだろう。デジタル化できるのは、あくまでプロセスの「ある部分」であって、お話を作る苦勞がそれで軽減されるってものでもない。

アナログ派よ、畏るに足らず。放送現場にもまだまだ生き残っているようですよ。

## デジタルとアナログ

東京映画新社・プロデューサー 高倉 三郎

ドラマ作りの世界に入って、今年で44年になります。その中で、なんとと言っても面白くてたまらないのは「企画」を考えることでした。

「こんなドラマを作ったら、みんなビックリするんじゃないか?」

「このぶつかり合いは、観てる人の胸に強烈に突き刺さるんじゃないかな……」など考えていると、その企画書が書きたくてたまらなくなってきます。

テレビのプロデューサーになってからだけでも、どれほどの数の企画書を書き続けてきたことでしょうか。

それを読む相手は、テレビ局のプロデューサーです。「彼が、この企画書をどう読んで、どう感じてくれるか?」書く狙いは、この一点だけです。

私は一時期「企画書・ラブレター論」というものを人に話したこともありました。

そしてワープロに出合った時は、ほんとうに感激しました。

印刷した企画書が、自分で作れるのです。

表現を直したり、相手を読みやすいように「行」を変えてみたり、それが瞬時にできるのです。

でも私は今でも、ものを書く時、粗書きは原稿用紙に鉛筆で、それをワープロで仕上げるという形を取っています。

鉛筆で書いていくと自分で納得がいくし、考えていることに色々な発見ができるからです。

古いタイプの人間なんでしょうね。

でき上がった作品をテレビ局に納めるのも、フィルムや2インチのビデオ・テープが、今では1インチの「D・2」というデジタルのビデオ・テープになりました。

それの方が、再生や保存にずっと良いのだそうです。

テレビもデジタル放送になり、デジタル・テレビで受信すると、今のアナログ放送よりずっとシャープに写ると言われ、大変結構なことだと思っています。

でも、やっぱり「ソフト」なのではないでしょうか?

「ドラマ」は観ている人の胸に、どう深く突き刺さっていくかの一点だと、頑なに思っておりますので、その表現手段が一層「的確に」そして「簡単に」に改良され、「グローバル」になっていくことには、大きな期待をしながら利用していこうと思っております。

## NHKラジオドラマ・データベース

元NHK(演出) 沖野 暲

NHKラジオドラマ・データベースを作っています。将来データを共有することになる放作協に、このデータベースのフォーマット作成をお願いすることになりました。

日本で放送が始まった1925年から今日までのNHKラジオドラマ全作品約一万タイトルを網羅、連ドラの全記録も初めて纏めました。主な放送記録は、タイトル・放送日時・作者名・作曲者名・主な出演者。スタッフは演出者ばかりでなく、専門職能の創造性を重視する現代的視点から技術(ミキサー)・効果マンの名前も収集して記載しました。作品の生きた姿を伝えるため、脚本やテープの保存データの他、時代を画した名作や大ヒット連ドラの梗概や紹介記事、主なコンクールの参加・受賞記録も参照できます。

これが将来、民放や放作協など関係団体のデータベースと連携し、それぞれが持つ記録や保存資料をデジタル・ネットワークで結ぶ20世紀ラジオドラマ・アーカイブに発展することを願っています。

## デジタル時代における作家とプロデューサーとの関係はどう変化するか

東映・京都撮影所 伊駒 伊織

結論を先に言えば、作家とプロデューサーとの関係は、「追われる者」と「追う者」との緊密度が深くなるだけで、本質的には変化しないと思う。

私の場合、京撮常駐のプロデューサーなので、存分にデジタル通信時代の恩恵に浴している。作品(TV時代劇・暴れん坊将軍)の台本作成が京都の印刷会社のため、テレビ局、本社、監督等の感想・意見を(皆の頭の熱い内に)速やかに取込み、地理的不便をカバーできるのも、FAXや電話などのデジタル通信の賜物だ。為に、作家にとって一日の得、プロデューサーには二日の得。理由を言えば、まず感想・意見が集約された原稿出来の日時が設定される。(受渡し方法は何か双方特に言及しません)。約束の日の前日、作家から電話があって、まだケツまでいれない、明日FAXする、と。現場プロデューサーの私は、当日FAXされた原稿を読み、小直しの電話を入れ、再度FAXされた原稿を印刷に回す。作家は一日命拾い(時間の余裕)ができ、私は、一日フリーで、翌日は居ながらにして原稿を受取り、二日の楽を得た気がする。不思議な



オフラインあれやこれや

山田 典枝

パソコン通信といえば、一人で部屋の中でパソコンに向かって、というイメージがありませんか？

ところが、意外なほど人と出会える機会があるのです。それは「オフライン」略して「オフ」と呼ばれています。

これはパソコン通信画面を「オンライン」と呼ばれるのに対し、電話線をつながないで意見を交換する状態、すなわち「オフライン」ということから。

パソコン通信では「会議室」と呼ばれ、趣味やさまざまな問題について、意見を交換する場所があります。

パソコンの会議室は簡単に言うと「大規模交換日記」とでも呼びましょうか。

例えばある芝居を見た、その芝居について芝居の会議室に感想を書く。それにコメントがつき、そうこうするうち必ず「じゃ、今度飲みたいスね」という意見が書き込まれ、あーいねいねいね、と賛同する人が現れ…

かくして、パソコンの画面の文字でしか知らない人(達)と直接会う機会ができるという段取り。

もちろん、出席するしないは各自の自由で、幹事はだいたい言い出しっぺがやります。

また、各会議室主催の新人歓迎会など、大規模なオフもよく行われます。

感慨だ。

今、作家やプロデューサーの知的作業部分は措くとして、ワープロ、FAX、電話、宅配便が必要欠くべからざるものになっているのは間違いない。更に、台本など現業物の搬送(短時日に)も画期的宅配法(例えば個人用簡易台本コピー機など)が開発されたら言うことがないのだが。

顔を向き合って喋々とやらず、電話でも語らず、深夜こっそりとFAXでやりとするような事態は私もいやだが、信頼はしても相性の悪いプロデューサーとは口利かず、ただ完成された原稿をFAXして完了すれば、どんなにか作家の精神的・身体的寿命は延びることか想像に難くない。しかしだ、これも携帯電話の出現によって変化を来たした。ひっそり暗闇に逃げ込んだつもり作家を、プロデューサーは携帯電話で追跡し、警告し、おびき出し、常に監視下に置こうとする。まるで足抜け女郎を追うストーカーだ。だが不図、作家に凝視されていて、逆ストーカーではないのかとプロデューサーも不安も覚える。不気味な関係の時代だ。

ワープロ、パソコン、FAX、携帯電話、伝言サービスなどは、人間にとって便利で且つ役立つ物だろう。きつと役立つのだろう。

しかし、生々しい撮影現場を抱えた作家、プロデューサーには、一筋縄ではいかない存在、優美でいながら口答えもする怪物・俳優という者がいる。この相手には、デジタル機器など役に立たず、人間の持つ口と手と体の肉体的行動で立ち向かうのが、最善で確実な手段であることは今後も変わらないだろう。

文豪トルストイは言う。芸術作品に要求されるものは、新しさ、誠実さ、明快さの三つだと。シナリオには当然必要だが、これらはすでに、デジタル機器が兼備しているものではないだろうか。不思議で不気味だ。

パソコン通信とインターネットの違い

パソコン通信というのは、文字だけのコミュニケーションです。主に、ホストコンピュータに設定された、掲示板や電子会議室を特定の会員に対して、提供しているサービスで、会員は、同時に書き込みもでき、読むこともできます。

それに対してインターネットというのは、世界中のパソコンやコンピュータを電話線などで結び、それぞれに画像や音楽、文字などのデータ交換を出来るようにし、またホームページという画像と文字、音楽をテレビ放送のように情報提供し続ける事が出来るコンピュータネットワークです。

このホームページには、世界中の誰もがアクセスすることが出来、読んだり、見たり、書いたりする事もできます。さらに、匿名性が高く、国境も関係なく情報を流すことが出来るので、犯罪に使うケースや、Hな画像だって、検閲なしに飛び込んできます。

わたしが初めてオフに出たのは7年ほど前かしらん。あの趣味の会議室のオフでした。

当時はまだまだ「パソコン通信」というと「ヲタク」な感じで(自分だってやっつるのに!)いったいどんな人たちが現れるやらキョーミとキョーフが入り交じり。

結局キョーミが勝って待ち合わせ場所に行っちゃいました。

画面上では(文字で)話したことがあっても誰も彼もが初対面。初参加はけっこう勇気が必要で、待ち合わせの場所に行き、目印をみつけてもなかなか声をかけることができませんでした。

「あの人たちかな?」と見当をつけた時の第一印象は「統一感がまったくない集団」。

そりゃそうなんですけどね。

「パソコン通信」をしていて、趣味が同じということだけが共通点ですから、性別・年齢・その他(?)はバラバラ。

しかしその共通点のみが大変重要で、日常では得難いものでした。話の説明をつけることなく自分の好きな話題で好きなだけ盛り上げられる快感!

パソコン画面ではペンネームをつけることができるので、直接会った場合でもいい大人が「(例・仮名)ポポリンチョさまん」などと呼ばれつつ、嬉しそうに会話するのです。

目からウロコというよりも、こんな世界があったのね状態でした。

パソコン画面の文章とは全く印象が違う人、思った通りな人、普段わたしの生活では滅多に会えない職業の人などな

ど「こんなに楽しくていいの?」とコーフンしまくりの初オフでした。

幸運な初体験をすませると後は病みつき期間となり、オフがあれば必ず出席するという時期が続きます。顔と名前が一致するとパソコン画面上で発言する時の楽しさもひとしお。この頃は生活全部が「パソコン」になっていました。

が、幸いわたしは実害がなかったのですが、やはり人が集まるといい人も悪い人もいて。

多くは女性に被害が集中します。

オフではメールアドレスの交換をすることがよくありますが、何も知らずにうっかり「勘違い野郎」に渡したらアウト。

毎日のように大量のメールが届き、パソコン通信するのがイヤになってしまった、という話を聞いたことがあります。

オフで話したことで親近感がアップしてしまったのでしょうかね。確かにオフ現場にはなかなか特別な高いテンションがありますが。

けれどそれは一般社会でも同じ。どんな場所でも、いくら自分が用心してもオカシナヤツというのはいるわけで、そんなに遭遇してしまったら、災難としか言いようがありません。

でも、そんなのはごく一部です。まっとうな人間が趣味・主張をサカナに楽しく集う、というのがオフの醍醐味です。それを一度体験したら「むやみにへんなことしてオフに出られなくなるのは困る、つまらない」と考えられる人が多数なのです。

守りたかった手書き原稿

森 治美

昨年、月刊ドラマの作家の近況で原稿をワープロに変えた話を書き、友人知人にも事ある度にその事実を伝えていたが、どうもこの事実が手書き原稿を頑なに守っている人と思われている。「えっ、出来るんですかワープロ?」

「えっ、出来るんですかワープロ?」会う人へそんな言葉をかけられる。ワープロ原稿を見てさえも誰かに打つてもらったと思われず、「打つてもらった人がいるんだ」とか「お弟子さんだったんですか」などと言われちゃう。十人に一人ぐらいは「凄、森さん打てるんだ」と半信半疑の言葉をくれるのがいいところである。

無理もない。長年に渡って自他共に認める機械音痴のアナログ人間なのだから。その上、それを吹聴してきたのだから。それにワープロが打てるようになったからと言って、機械に強くなった訳ではないし、デジタル人間に移行した訳でもない。

ワープロ原稿にしたのは必要に迫られての事である。企画書、プロットに始まり何時かシナリオ、戯曲までもワープロ原稿が常識のようになって、「手書きでいいですよ。こちらでワープロ打たますから」と言われていた局や制作会社、演劇プロデューサー諸氏さえからも「ワープロ党」

れ打ち(書き)進められた事だ。無論ブライントタッチとはいかないが、特に操作に戸惑う訳でも打つが遅くて困るほどでもない。原稿にするのにどちらが早いのか点でも「同じ」と言える。原稿用紙にしろ画面にしろ初めは白。少し書いては、打つては、考え考え原稿にしていくのだから当たり前のかも知れないがむしろ、手書きであら、でもない、こうでもない、書き進めるより、機械的にあるだけにモヤモヤした思考が整理され打ち進められるような気さえずる。

そんな折も折、幸か不幸か原稿用紙の折目を埋めることが苦痛でたまらなくなった。白紙原稿の前で悪戯に時間ばかりが流れた。去年三月の事だ。それで心が決まった。この原稿を脱稿したら、たとえどんな事があるうと原稿はワープロにする。

でもやはり、思った漢字がすぐにはでない事には奇だたしがある。おまけに「漢字が書けなくなる?」

そんな馬鹿なと笑っていた通りになった。情けない。又、「文体が変わる」「作品の質が変わる」とも言われていたが、それは今のところ私にはない。変わる事がいい事なのか悪い事なのかも判らないが、手書きにしろワープロにしろ文体も作品の質も、変わると思えばその人自身が変った時に違いない。

原稿をワープロにして一年。ワープロを毛嫌いする事はなくなったが、どちらが好きかと問われれば、今も即座に「手書き」と答える。日本語の文字には、縦書きの手書きが一番馴染み美しい。そう思うからだ。

そんな折も折、幸か不幸か原稿用紙の折目を埋めることが苦痛でたまらなくなった。白紙原稿の前で悪戯に時間ばかりが流れた。去年三月の事だ。それで心が決まった。この原稿を脱稿したら、たとえどんな事があるうと原稿はワープロにする。



『放送作家情報』ができるまで

現在、過渡期です。何が過渡期かという、デジタル的な流れとアナログ的な流れが混在しているという意味で中途半端な状況です。この過渡期の現状を少しでも理解していただければと思います、「放送作家情報」編集の裏で、どういう作業がなされているか、2つの原稿を例に顛末記にしてみました。(文中の**イタリック体**はアナログ的、**ゴシック体**はデジタル的な作業を表わしています。)

原稿①の場合

電話で原稿依頼。ワープロをお使いなので、「データをフロッピーでもらえませんか?」ともちかけるが、「やったことがない」というご返事でしたのでやむなくファクスで送ってもらう段取りに。

ペーパー・プリント・ファクスが2種類きたので「?」と思っていたところ、お電話があり、「直しましたので後のほうを使ってください」とのご指示。

ファクス原稿をスキャナで2値化したBMPデータに変換し、OCRソフトでMS-DOSテキスト・データとして認識。

ただし、ファクス原稿にはきずがたくさん入っていて認識率が悪く、手入力により修正。

さらに確認のため、修正を加えたMS-DOSテキスト・データをプリントアウトして元原稿と照らし合わせる赤字校正作業。

確定したMS-DOSテキスト・データをNiftyManagerを起動して広報委員長にメール送信。

注①

**電話** ここでは電話一般のこと。電話回線がアナログかデジタルかによって伝達される声の鮮明度がかかりがち。受話器を左耳で受けるか右耳で受けるかが人によってちがうのはおもしろいなあ。

**ワープロ** ここではワープロはワープロ専用機のこと。コンピュータのワープロ・ソフトのことをワープロという場合もある。文脈で判断する必要がある。

**データ** この場合はテキスト・データのこと。ひと口にテキスト・データといっても、コード体系によっていろいろある。世の中を席卷しているのがマイクロソフト提唱によるMS-DOS形式。

**フロッピー** デジタルデータを記憶する媒体のひとつ。円盤形の薄い磁性体を四角いプラスチックのケースで保護する構造になっている(やってみたことのない人は、一度いらぬいフロッピーを分解してみるとよくわかりますよ)。円盤の直径によって8インチ、5インチ、3.5

**ペーパー・プリント・ファクス** これにも2種類あって、感熱紙にプリントされるものとコピー用紙などの普通紙にプリントされるものがある。感熱紙にはロール状のものもある。利点は送られた原稿をすぐ読めること。欠点は紙やインク資源の無駄。読むだけで済み、しかも緊急を要

仕事はデジタル派  
趣味はアナログ派

星川 泰子

「私は、6年程前からある社会人ばかりで構成される素人劇団に参加しているのだが、そのきっかけがパソコン通信で「団員募集」の書き込みを読んだ事だった。今では、20人近くいる劇団員の半数以上が、私と同様にパソコン通信で「釣れた」メンバーである。

その影響で、かなりアナログ派だった主宰をはじめ、ほとんどの劇団員がパソコン通信のIDを持つようになった。よって、劇団員への連絡は、ネットワーク上に設けた我が劇団専用のコーナーに書き込む事で行えるようになっていく。便利である。緊急の連絡でない限り、書く側も見ると、相手の都合を考えずに自分の好きな時に書いたり読んだりできるし、第一、電話と違って一回書き込めば、メンバー全員に正確に伝わる。

だが、このコーナーを頼り過ぎて、トラブルが生じた事もあった。文章で意見を言い合うと、誤解が誤解を呼び揚げ足取りが加熱する現象は、パソコン通信ではありがちなのだが、我が劇団でも初期の頃に数回あった。激した主宰は、「パソコン通信ばかり頼らずに、会って酒を酌み交わし、腹を割って話せ!」そもそも客と顔を合わせて、同じ空間を共有するのが芝居なんだ! だから、俺はパソコン通信なんて嫌いだ!」と宣った。

(ちなみに、彼は「嫌い」という以前に機械オンチである。未だに、彼は書き込みが出来ず、読む事しか出来ない)

なるほど、本人の機械オンチを差し引いても悪くない言い分だ。パソコン通信は、情報は正確に伝えてくれるが、確かにきめ細かいコミュニケーションには向かないかもしれない。

哀しい哉、電話に慣れきった現代人には、文字伝達のポキャブラリーと文章力がないからだ。誤解を恐れずに言うと、特にデジタル志向の強い、理科系、技術系の人々の文章は硬い。使用マニュアル書のような文体では、恋も友情も演劇論も語れないというもの。

以来、うちの劇団では、書き込みに幾つかの規制を設けている。

主には、重要問題について一方的な意見を書き込まないこと。重要な問題は、稽古場でみんなが顔を合わせて話し合う事になっている。

誰かが、その禁を破った場合、反対意見を書き込むのではなく、イエローカードを提示する事になっている。

我が劇団では、インターネットにホーム・ページも持っている。

インターネット上では、ビッグなあの劇団とも憧れのあの劇団とも肩を並べてリストに載っているのだ。インターネットに有名無名の差別はない。

さて「パソ婚」という言葉をご存知でしょうか。オフに出て、男女が出会い、結婚するというのは現実にとっても多いのです。映画やテレビドラマでもネットワークで出会って恋して…というものが増えました。

わたしは10組を超える「パソ婚」に出席させてもらっています。また、パソ通で知り合った友達の結婚式にも出席している(お相手がパソ通で知り合った人ではないケース)いちばん出まくっていた年は平均月に1~2回出席していた、なんてこともありました。現在はそんな無茶してません。

「パソ婚」についての特徴を一言で言うと「スピーディー」。つきあってもう5年、なんてカップルはあまりないようです。

結婚紹介所やお見合いパーティーと違うのは最初から「結婚したい」という意識とは無縁なところから始まるので、お年頃の男女が同席してもあまりガツガツしたところがないのです。「合コン」とも違う。わりと純粋に「仲間」な感じから始まるのが、逆にご縁を作るのかも。

「パソ婚」の始まりは、顔も知らない人の文章を読む。(ここにこんなこと書くのも釈迦に説法ですが)まず「文は人也」で始まるわけ。人柄がにじみ出ている文章というのは上手下手は別にして魅力的ですものね。

その段階のあとに顔を合わせるわけですから、なんだかもう興味のある人のいろんなことを知ってるような気になっちゃうわけ。

それからメールのやりとりをしつつ、気持ちを確かめあいつつ、めでたく「結婚」へというパターン。

メールだけで結婚決めちゃった、というケースもあるようですが、わたしのまわりにはいません。やっぱりオフが決めた手になるみたいです。



今後もどんなに電腦だサイバーだと言われても、直接会う「オフ」はなくなるでしょう。

画面上では文字だけでも、モニターの向こうには自分と同じ、呼吸する人間が座っているという意識があれば、どんな人なんだろう会ってみたいなあ、と感じるのが人情だと思うのです。

そしてちょっとおかげさですがこんな出会い方は人類史上初でしょう。

わたしはパソコンとモデムと電話線を使い、オフに出席して、全国各地に知り合いや友人ができました。

不思議でおもしろい時代に生まれたなあ、と感じています。

すばらしい!

コンピューター・ゲームのプログラマー、製薬会社研究員、食品メーカー研究員、看護婦、電気屋、等々で構成されている我が劇団。入るまで芝居を観た事がないなんて人もユニークというか無謀な集団で、本来芝居などとは縁のないデジタル世界の人間が多い。

しかして、やっている芝居の内容とはいえば、「笑いと涙と感動」を目指す、めちゃくちゃアナログ志向である。やっぱり、「感動」と「カタルシス」は、アナログに有るのかなかも……。」

「紙がない!」

長川 千佳子

「あつ、紙がない……」

個室で切羽詰まっている時にこういう状態になったこと、誰しも経験があるはず。

もちろん、仕事場という個室の「紙」の話です。

特にFAX用紙というのは機械の構造上、目に見えない所で体を丸めているので、気づかぬうちに減っており、「あと少しになってしまいましたあ」というお知らせ赤ラインが突然出てきてこちらを慌てさせます。

相手先は今、何としてでもFAXを送りたい。けど用紙の買い置きがなく、そんな時に限って急ぎの原稿を書いていた、二日酔いで一歩も歩けない状態だったりして、ちょっとしたパニック(たいそうな…)に一。何かで代用できるものではないので、結局は買いに行かなくてはならないのですが、紙ペラごときに振り回されているようで、いつもムカツキ顔で文房具屋に駆け込んでいました。

…が、便利なものに気づきました。パソコン・モデムでの直接受信。

重要なものはディスクに保存でき、不要な部分はその場で削除。必要分はもちろんプリントアウトできます。しかも、普通紙なので扱いがラク。

(以前からモデム送信をしているのだから、もっと早く気づけば良さそうなんですが)

私がパソコンに頼る理由はもっぱらこの「通信」です。

メール送信の場合、百枚近い原稿でもわずかに三分程度で送ることができ、FAXモデムでも送ってる途中で詰まったり、「\*ページだけ届いてません」などというミスがなく、安心。

「紙詰まり」「紙がない」パニックから解放されたい方は、ぜひモデム通信の導入を!